



■ フォト・エッセイ ■

ナイルの恵みで耕す大地 ——エジプトの稲作——

写真・文
大塚雅貴
Masataka Otsuka

収穫の前に丁寧に生育状況を見回る

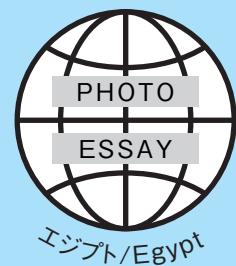
ギザの三大ピラミッドをはじめ、壮大な遺跡が古代文明の繁栄を今に伝えるエジプト。遺跡の前をナイル河が悠々と流れ、渡し舟に乗り込む人々の姿はまるで数千年前と変わらない光景を見ているようで時の経過を忘れてしまう。そして、サハラ砂漠を行く道を走れば果てしない大地に感動し、夕陽で染まった砂丘の美しさに魅了される。

私はこの自然と古い歴史の素晴らしさに憧れて、エジプトでの語学留学をはじめた。首都のカイロでイスラム教徒のアジア系留学生との寮生活。生活費はひとり月々四〇エジプトポンド（当時一六〇〇円）でタイ、フィリピン、インド人などの計六人の愉快な暮らしだった。そして共通語はいつもアラビア語。もちろん国籍が違えば習慣や文化が違うのは当然で、喧嘩や言い争いは日常茶飯事。しかし、そんな彼らと気まずい雰囲気になっても、唯一楽しい時間が食事時であった。全員が「ご飯派」で、彼らの祖国では三度の食事にご飯は欠かせないという。我が寮の食卓に並ぶコメひと粒ひと粒をよく見ると、短くて太め、それでいて水分を多く含んだ粘りのあるコメだった。

エジプトでコメが栽培されたのは一四〇〇年前、アジア、またはスペインから伝わったと言われている。一九世紀中ごろから本格的な栽培がはじまり、ナイル河の氾濫を利用した灌漑が進み、稲作は発展した。独立を迎えた一九二二年、イタリア、アメリカ、中国、インド、日本から集められた



オアシスの水田に水を注ぎ、土を耕していく



水田での作業はすべて手作業で行われる



青々とした水田が続くカフル・アル・シェイク

約二五〇種の中から選ばれたのがジャポニカ米だった。現在、コメは小麦、とうもろこしに次ぐ第三の生産量を誇る穀物である。私は国内唯一の穀倉地帯でエジプトの「食料庫」と呼ばれるナイル河下流に位置するデルタ地帯を目指し、カイロから北に車を走らせた。タンタという商業都市から五〇キロ、カフル・アル・シェイクにはまぶしいほどに青々とした稲が輝いていた。北アフリカの大地に立ちながら、あぜ道を牛が歩き、雑草取りをする農夫、そして木陰でおしゃべりをする子供たちの姿。まるで日本の原風景を見ているような懐かしさが漂っていた。ただ、ターバンを巻く人々や田んぼの中に立つナツメヤシの木々だけがエジプトにいることを実感させた。

「今年も豊作だ、これも神アッラーのおかげだ」と汗を流して刈り取りに励むアハマドさん。彼は一フェツダン（約〇・四ヘクタール）の田を所有し、ジャポニカとインディカ米を育てていた。「ここではパサパサしたコメより水分の多いジャポニカ米が高く取引されるんだ」。

色、香り、高さ、穂の数など実に様々なコメが試験的に植えられているライス・リサーチ・トレーニングセンター（RLTC）では、積極的な品種改良に力を注いでいる。所長のディライズさんは「年間一人当たりのコメ消費量は六〇キログラム、国全体の消費は四三〇万トンに及び、生産性を向上させている今日ではシリアやトルコなどに



丁寧にあぜの草取りを行う



ジャポニカ米を中心に新種開発が進んでいる



温泉が湧き出るファラフラ・オアシス

輸出するまでに成長した」とこれまでの品種改良の成果を語った。さらに「わが国では、ナイルの流れを失わないために、ナイルの水使用量が（スーダンとの）二国間協定で年間五五〇億トンに決められています」と続けた。肥沃なデルタ地帯とオアシス以外は砂漠に覆われているエジプトで、農地を増やすことは容易ではない。つまり限られた土地の中でより多くの収穫を上げることが重要だと考えている。稲作については年間一〇億トン、全使用量の約一八%、さらに六四万ヘクタールという限られた土地の中で収量を上げられるかが課題だ。

エジプト全土に占める耕地の割合は三%、その大半がこのナイルデルタに集中する。遠くヴィクトリア湖を水源とする白ナイル河、エチオピアのアビシニア高原を水源とする青ナイル河、そしてアトバラ湖という三つの河からなる全長六八〇〇キロに及ぶナイル河の定期的な氾濫によって生まれたデルタ地帯。その上流の浮遊物が堆積された肥沃な大地には地中海性の温暖な気候、網の目のように張り巡らされた水路がエジプトの農作物を支えてきた。

ところが、最近では砂漠化防止や南部のオアシスからの人口流出を防ぐために、オアシス開発を進めている。旧石器時代から遊牧民が行き来し、砂漠交易の要所として栄えたファラフラ・オアシスでは、湧き出る温泉を利用した水田開発が注目を浴びている。カイロから南西に五五〇キロ、砂の



砂漠に囲まれた水田地帯



脱穀作業の後は女性たちが選別作業を行う



家族総出で脱穀作業に励む

壁に囲まれた窪地に一際目立つ緑の大地。村の中心から車で一〇分ほど走ると、果てしなく続く水路の果てに水田が広がっていた。赤茶けた砂の色とは対照的な水田地帯。ひと束ひと束丁寧に刈り取って収穫作業に励む人々。「機械で植えて刈ったものは、美味しくない」と、強く私に話したアブドルアジーズさんは、一九八八年に南部のアスワンから来た。彼は政府から土地を借りて稲作をはじめ、一九九四年には二〇フェッタン（約八ヘクタール）の土地を一〇〇〇エジプトポンド（約三万円）で購入した。

「最初は自らの耕作機で整地を行い、水路を作り、馴れないイネの世話に大変苦労したが、この多量に沸く温泉のおかげで収穫量は増えた」と笑顔で答えた。温水は水路を流れていく間に冷やされ、常に十分な水が田に注がれている。かつては苦しい生活を強いられていたアブドルアジーズさんも一九九一年の流通自由化にともないコメも高く売れ、生活は楽になったと話す。

ロバがとれたてのトマトを運び、ラクダが車道の端を悠々と歩く。かつて西のリビアから来るラクダキャラバンの中継地だったこの村には多くの水田が完成し、今も農地開発が進んでいる。灼熱の太陽のもと、大粒の汗を流す農夫たちは、新たな土地で苗を植えはじめた。そしてこの過酷な環境で暮らす彼らの表情には笑顔が満ちていた。

（おおつか まさたか／写真家）